



きょうようときょういくのままに ⑩

臨場感 クロマキー バーチャル

東京学芸大学名誉教授 篠原文陽児

暑さに辟易したこの夏、ハワイでと思わせる写真が1枚、机の上にある。エメラルドグリーン的大海と白砂のビーチを背景に、強い日差しさえも癒しにかえる大きな椰子の葉の下。ベンチには、正面を向いて笑うインドネシア人の友人と筆者。実は、この写真、今から20年ほど前に、教育工学の国際教育協力事業の一環で訪ねたS社ショールームで撮られた1枚である。当時としては珍しく、**臨場感**あふれる、**クロマキー**技術による写真である。

このところ、テレビ番組を見ているとき、特に出演者の服装の色に、やや神経質なまでに注意が向く。服装が青系統でないかとか、みどり系統でないかとかである。特に、ニュース番組や対談あるいは天気予報など、スタジオを使った情報番組あるいはドキュメンタリーで、このことが顕著。「だまされないぞ」と、時には、身構えることもある。

つい先ごろ8月某日。都営の地下鉄A駅を降り、緩やかな上り坂を歩くこと5分余り。左に折れると、白地図の等高線を思わせる幾重かの階段が特徴的なビルが左手に。地上3階、地下2階の造り。この地下2階。吹き抜けのバーチャルスタジオを見学するよう、いく。

まず通された部屋が、それ。バーチャルスタジオ。もちろん、スタジオそれ自体は、リアルな、そのもの。60坪の広さがあるというフロアには、ビデオカメラとVRセンサーが搭載されたクレーン、移動式三脚付きビデオカメラ、液晶モニター、マイク、照明機材。後ろを振り返れば、公開収録に有用な昇降式段床。目を天井に移せば、黒を基調の照明用吊バトンと、大小、形さまざまな照明機材がある。

そして、そして、ここが、キモ。

クロマキーカーテンはブルーとグリーンの種類。壁は白で、計3種類の Horizont。すでにお分かりですね。そう、前者によって、被写体のブルーやグリーン部分がコンピューター・グラフィックで作られたバーチャルセットに置き換わり、仮想空間が作り出されるという仕掛け、いえ、仕組み。しかも、バーチャルセットの根幹をなすライブラリーは9カテゴリー、150種類もあるため、施設利用者は美術セットを持ち込むことなく、映像制作のいかなるシーンにも対応できるという。一例を挙げれば、ニュース番組や情報番組向きのそれ、天気予報、ドキュメンタリー、スポーツ用など、世界の主だった町並みなどなど、という具合。当日は、この一つ、モアイ像が立ち並ぶ広場を、見学者があたかも散歩などするかの実写で、体感。

一方、スタジオ以外は、テレシネ、リニアとノンリニアの編集室や、デジタルアーカイブ化、メディア変換・出力と保守および保管等々を効率的かつ機能的に支援し実現する部門と部屋また部屋。クオリティ・ファーストの最新映像関連設備を堪能。

映像制作の過程は3段階。企画立案が中心のプロダクション、撮影現場のプロダクション、映像と音声の質を高める編集とパッケージ化を中心とするポストプロダクションである。いずれの段階でも、進化し続ける技術の裏には、制作者と利用者それぞれの、正しく豊かさに満ちた臨場感と感動を共有する源泉となる、想像と創造の翼がある。

今改めて、映像等メディアを批判的に読み解くメディア・リテラシー教育の推進を期待したい。